

16 世紀アルバニア語の祈禱書における 目的語句の構造について

井 浦 伊知郎

0. 序

アルバニア語による現存最古の文献は、北部アルバニア出身のカトリック司祭ジョン・ブズク Gjon Buzukuが1555年に刊行したミサ用祈禱書 Meshariである (Camaj 1960: 7-9, Elsie 1997: 33-36, Hamiti 1996: 23-25)。大部分は聖書の抄訳より成り、北部方言を主に、他地域の方言も広く含んだアルバニア語で書かれている。1740年にはローマで唯一の残部が発見されていたが、今世紀に入ってからアルバニア語の通時的研究上最も重要な資料として注目される様になり、数回の部分的な紹介を経て、テキスト全文のファクシミリ版がヴァティカン (Ressuli 1958) とアルバニア (Çabej 1968) で刊行されている。

ここでは、Buzukuの聖書と対照可能なテキストから目的語 (目的語節) 句の用例を示し、他の中世アルバニア語や現代アルバニア語との間にどのような異同が見られるか検討する。

1. 人称代名詞弱形と強形の重叙

アルバニア語では、目的語と文法的上一致する人称代名詞の弱形が、動詞の直前に重複して現れる (重叙する) ことが多い¹⁾。Buzukuの場合、1人称及び2人称の場合には重叙表現が見られる (Demiraj 1993: 210)。まず、これらのことを例文で確かめよう。

1.1. 1人称及び2人称の場合

1人称における重叙の例は比較的多く、既に現代語の用法に近いと言える (" "内はウルガタ訳、() 内は現代アルバニア語訳)。

(1) *Përherë ju të kini të vobegj me vetëhenë, e muo të mos*
anytime you have-subj. pl. 2 the poor with oneself and sg. 1. acc. not
më kini përherë.
sg. 1. acc. have-pl. 2

"nam semper pauperes habetis vobiscum me autem non semper habetis" (Mt 26:11)

「貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、私はいつも一緒にいるわけではない」

(*Skamnorët i keni gjithmonë me vete, e mua nuk më keni gjithmonë*)

(2) *E mos na sjellë neve ñde e tentuom,*
 and not pl. 1. acc. pull-imp. sg. 2 pl. 1. acc. at be tempted
por neve na liri ñ sē keqi.
 but pl. 1. acc. pl. 1. acc. liberate-imp. sg. 2 from the evil

"et ne indicas nos in temptationem sed libera nos a malo" (Mt 6:13)

「私たちを誘惑にあわせず、悪いものから救ってください」

(*E mos lejo të biem në tundim, por na shpëto nga i Ligu!*)

例(3)も1人称が重叙している。ただし2人称の方は重叙していない。(4)もそうした例の一つである。

(3) *U për të vërtetë juve thom se një ñ jush muo*
 I for the true pl. 2. dat. say-sg. 1 that one from you sg. 1. acc.
të më tradhëtonjë.
 sg. 1. acc. betray-subj. sg. 3

"amen dico vobis, quia unus vestrum me tradituus est" (Mt 26:21)

「〔諸君に〕 はっきり言うておくが、あなたの方のうちの一人が私を裏切ろうとしている」

(*Për të vërtetë po ju them: njëri prej jush do të më tradhtojë*)

(4) *Për të vërtetë u juve thom se u nukë gjeta*
 for the true I pl. 2. dat. say-sg. 1 that I not find-aor. sg. 1
kaqë fe ñdë Israelt.
 such religion at

"amen dico vobis non inveni tantem fidem in Israhel" (Mt 8:10)

「〔諸君に〕 はっきり言うておく、イスラエルの中でさえ私はこれほどの信仰を見たことがない」(*Për të vërtetë po ju them*)

例(3)(4)の様に重叙を伴わない *juve thom se...* の構文は、この他にも随所に頻出する²⁰。現代語では、強形 *juve* のみが動詞に先行することはあり得ない。常に弱形 *ju* を動詞の直前に伴うか、さもなければ(現代語訳の様に)弱形 *ju* のみが動詞の直前に置かれるかである。この型は動詞 *thom* 「言う」を用いた文で特に多いが、Buzukuにおいてはこの *thom* に先立って *u për të vërtetë* など(聖書独特の)決まり文句が置かれることが多く、文体上固定されたものになっているが為に重叙が起こりにくくなっているとも考えられる。

一方、Buzukuから約3世紀後、南部アルバニア出身の文学者 Kostandin Kristoforidhi (1826–1895) による1872年の訳では次の様になっている (Cirrincione 1968: 85)。

(04') *Me të vërtetë po u thom juve se as ndë*
 with the true now pl. 2. dat. say-sg. 1 pl. 2. dat. that anything at

Israel s' kam gjetunë kaqi besë.

not find-pf.sg.1 such belief

ここでは、Buzukuと同じ箇所の人称代名詞強形が弱形で繰り返されており、この時点で既に今日の重叙傾向により近付いていると考えられる。

1.2. 3人称の場合

3人称の目的語の場合は、与格であれ対格であれ重叙が起こらない例の方が多い。

(5) *Nd atë mot tha Jezu dishipujet vet.*

at that time say-aor.sg.3 Jesus disciple-pl.dat. own

"altera die ad discipulos suos ait" (Lk 16:19?)

「その翌日イエスは弟子たちに言われた」

(*Të nesërmen Jezusi u tha nxënësve të vet*)

ちなみにKristoforidhi訳では次の様になっている。現代語では間接目的語（与格）の重叙は義務的なものである。従って、こちらの方が現代語の用法に近いと言える。

(5') *U thoshte edhe dushepujvet vet.*

pl.3.dat. impf.sg.3 also disciple-pl.dat. own

だが実際には、Buzukuでも3人称与格で重叙する。特に「主は彼らに言われた」型の文に限ってみれば、与格弱形 *u* の重叙を伴う例は多い。

(6) *E i mujtuni Zot bekoi ata e u tha atyne*
and omnipotent God bless-aor.sg.3 them and pl.3.dat. say-aor.3 pl.3.dat.
kështu tue i ordhënuom... (XXVI)

so (gerund.) pl.s.acc. order-part.

「全能なる主は〔アダムとエヴァを〕祝福し、〔二人に〕語って言われた」

こうした例は、近代では義務的なものとなっている間接目的語の重叙、それも人称代名詞与格の重叙が、Buzukuの時代から確立されつつあった可能性を示している。

では直接目的語（対格）は重叙しないだろうか。確かに、重叙しない例は与格の場合よりも多いと考えられる。

(7) *E ata bekoi Zotynë...*

and them bless-aor.sg.3 Lord

"benedixitque eis" (Gen 1:22)

「神はそれらのものを祝福して…」 (*Hyji i bekoi...*)

この場合、現代語であれば、言及済みとして導入された目的語は重叙し¹⁰、対格弱形 *i* が動詞 *bekoi* に前置される（例えば *ata i bekoi*）のが自然である。この例について言えば、Buzukuの用法は現代語の傾向と一致しない。

しかし一方では、テキストの文脈を精確に意識して行われたと考えられる様な重叙の例もある。次の連続する3例文は福音書において、ペトロが捕えられたイエスのことを「知らない」と3度言う場面のアルバニア語である。

(8) *U nukë di qish ti më thuo.*

I not know-sg.1 what thou sg.1.dat. say-sg.2

"nescio quid dicis" (Mt 26:70)

「何のことを言っているのか、私にはさっぱりわからない」(*Nuk di ç'po thua*)

(9) *Se u këtë nieri nukë e njoh.*

that I this man not sg.3.acc. know-sg.1

"quia non novi hominem" (Mt 26: 72)

「[ペトロは再び] 『そんな人は知らない』 [と誓って打ち消した]」

(*As që e njoh atë njeri*)

(10) *se aj nierinë atë nukë e njoh.*

that he man-acc. that not sg.3.acc. know-sg.3

"quia non novisset hominem" (Mt 26:74)

「[ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら] 『そんな人は知らない』 [と誓い始めた]」

(*se nuk e njihte atë njeri*)

2. 目的語補文を受ける弱形代名詞の例

Buzukuの場合、大部分の例は重叙なしである。

(11) *E pa Zotynë se drita ish e mirë.*

and see-aor.sg.3 Lord that light be-impf.sg.3 good

"et vidit Deus lucem quod esset bona" (Gen 1:4)

「神は光を見て、良しとされた（光が良いことを見た）」

(*Hyji pa se drita ishte gjë e mirë*)

(12) *Nd atë mot pa Gjoni Jezunë se vin tek aj, e tha.*

at that time see-aor.sg.3 Jesus-acc. that come-sg.3 to him and said

"altera die videt Iohannes Iesum venientem ad se et ait" (Jh 1:29)

「その翌日ヨハネは自分の方へイエスが来られるのを見て言った」

(*Të nesërmen Gjoni e pa Jezusin duke ardhur kah ai e tha*)

しかし主節の動詞が知覚動詞 *verba sentiendi*である場合、少数だが重叙を伴う。これは現代語にもしばしば見られることである。

(13) *si e panë se ish shkuom ñ këso jete...*
as sg. 3. acc. see-aor. pl. 3 go-plupf. sg. 3 from this life

"ut viderunt eum iam mortuum" (Jh 19:33)

「[イエスのもとに] 来てみると、既に死んでおられたので… (彼が死んだのを見て)」
(*si panë se kishte vdekur...*)

Buzukuから約半世紀後、アルバニア北部出身の司祭 Pjetër Budi (1566~1623) によるキリスト教要理 (*Dottrina Christiana*) のアルバニア語訳 (1618年刊) にも「e...se 補文」の形がある (Demiraj 1985 S.582, 引用はDemiraj 1993 S.210)。

(14) ...*këjo shinte fjalë bukur na e shtie*
this saint word beautiful pl. 1. dat. sg. 3. acc. impress-sg. 3
në ndë mend e ndë shqisë tanë se si ò mbë qish arrësye
at in heart and sense our how or at what reason
na fajëtorëtë duhetë gjithëherë e gjithëherë me e pasunë...
pl. 1. dat. sinner-pl must-pl. 3 always and more wealthy

「この麗しく聖なる言葉が我々の心と意識の中に思い起こさせるのは、
いかにして我々罪ある者達がより心豊かであるべきかということだ」⁹

例(13)などを見る限り、そうした構造が既にBuzukuの時代においてもある程度確立していた可能性がある。

3. 関係節内における代名詞重叙の例

こうした現象が見られるのは単文構造だけではない。関係代名詞 *qi* (不変化。現代語では *që*) が関係節内で目的語として機能する場合、重叙代名詞を伴うことがある¹⁰。これも現代語では頻繁に見られる傾向で、Buzukuの場合、頻度はかなり低いが数例存在する。

(15) *E ish një i vobeg qi e kluonjinë Laxarë...*
and be-impf. sg. 3 one poor which sg. 3. acc. call-pl. 3

"et erat quidam mendicus nomine Lazarus" (Lk 16:20)

「ラザロという貧しい人が…」 (*një skamnor, që quhej Lazër*)

同じ箇所では *Kristoforidhi* 訳に重叙が見られる。ただし関係代名詞が示すものを受けて重叙しているわけではないから、単純に比較することはできない。

(15') *i vobek qi e kishte emninë Lazar...*
 poor which sg. 3. acc. have-impf. sg. 3 the name-acc.

4. 考察

Buzukuのテキストにおける動詞と目的語の構造で興味深いのは、代名詞重叙や補文標識となる接続詞節の用法等において、現代語と同様の用法が既に生じている点である。こうした特徴がBuzukuに特有のものだったのか、或いは中世アルバニア語において全般的に定着しつつあった傾向なのか、またバルカン諸言語の中での位置付けなど、他の中世テキストと検討していかなければならないのだが、ここでは差し当たりBuzukuの例から得られた傾向について見ていく。

なおその前に、こうした重叙の頻度が現代語のそれと比べて格段に低いことに留意する必要がある。本論文で挙げた例は、あくまで重叙現象の生じているものを主に選んだものであり、テキスト全体では、弱形人称代名詞を伴わず、目的語（または目的語節）のみ、または強形人称代名詞のみという文の方が圧倒的な割合を占める。特に、

①現代語においてはむしろ義務的とさえ言える与格の重叙傾向が、Buzukuの時期にはそこまで進んでおらず、

②1人称または2人称代名詞の弱形による重叙も、例は多いものの必須的に生じているわけではない。

といった点で、中世アルバニア語の目的語重叙に、現代語と全く同様の傾向を見ることは勿論できない。その点は、過去の研究でも指摘されていることである。

だがその一方で、

③3人称代名詞の弱形による重叙は、数は少ないものの決して皆無ではない。特に(6)に見られるように、それが無視できるような程度のものではない例もある。

④しかもそれらの中には、2.で示した様に補文節全体を受けるものや3.で示した様に関係代名詞を受けるものなどの例も存在する。

⑤また例文(8)(9)(10)の様に、文脈を意識した重叙の例がある。など、今日のアルバニア語にもよく見られる様な例が既に現れている。

特に③について付言しておく、特定の表現に集中しているとは言え、与格に対する義務的な重叙表現の一手手前とも見える傾向がBuzukuのテキストに存在することは、興味深い。

1.2.で述べた様に、現代アルバニア語の与格（間接目的語）は義務的に弱形で重叙される。一般的に言えば、与格、或いはより正確に行為の受容者（recipient）は、有標性の階層（"markedness" hierarchy）において他動詞の目的語である対格、或いは被動作主（patient）より上位で（Givón 1984: 87-89）、また話題性の階層（topic hierarchy）においても被動作主の上位にある（Givón 1984: 168-183）。しかも与格が示すものは殆

どの場合[+human]か[+animate]であり、これもまた話題性の階層の上位に位置する。更に[+human]や[+animate]という条件下では、スワヒリ語やルーマニア語など他の言語でも、二重目的語の構造をとることが知られている（ただし definite、或いは specific object の場合。Givón 1984: 371-372 ルーマニア語の例は Hayashi 1990: 887f.）。アルバニア語でも、本来はこうした背景で与格の重叙が行われるようになったものと思われる。ただアルバニア語が（そして他のバルカン諸言語も多かれ少なかれ）他地域の言語と大きく異なるのは、本来話題性などに拠っていた重叙の範囲が拡大・定着し、特に与格においては、今日もはや必須の他動詞句成分と言ってもよい状態になっている点である。

以上の特徴は、本文で例を挙げたBudiなどBuzukuとほぼ同時代のアルバニア語においても同様で、更に KristoforidhiなどBuzukuより若干後代のテキストを見る限りでは、それが現代語の傾向へと漸次近付いている様に見える。更に他の16～17世紀の文献⁹⁾からも同様の例文が出てくれば、この可能性は高くなるのではないかと考えられる。

* 本論文は、1998年9月12日に西日本言語学会で発表した原稿に加筆訂正したものである。旧稿例文は Çabej版のみを用いたが、本稿では Ressuli版テキストとも適宜照合した。また例文の日本語訳は、該当する限り新共同訳聖書による。

註

(1)現代アルバニア語における目的語重叙の条件は、意味的な観点から概して次の様に整理される（主にBuchholz&Fiedler 1987, Domi 1995, 1997）；

重叙する場合

① 1人称及び2人称；本文参照。

② 直接目的語がテーマであるか、テーマの領域内にある、旧情報を含むかまたは既知の文内容（特に補文節）として記述される場合；

1) *Na paskësh qenë njëherë një bari i dëgjuar kudo për përgjigjet e mençura
...Dëgjoi dhe mbreti për zgjuarsinë e tij...i tha:*

"Më kanë thënë se je shumë i mençur."

me say-pf. pl. 3 be-sg. 2 very clever

「昔々あるところに一人の男がいて、賢い答えをする者として知られていました…王も彼の賢さを聞き…王は彼に言いました『おまえがたいそう賢いと皆わしに言っておる』」

...Mbreti e pa se bariu qenkesh vërtet i zgjuar...

king sg. 3. acc. see-aor. sg. 3 the man be-admirative. sg. 3 truly clever

「王はその男が本当に賢いとわかりました」

2) "Kam qejf të mësoj dhe unë shkrim e këndim shqip." tha djali.

"Po nga e di ti se këtu mësohet shkrim e këndim shqip?"
now from where sg. 3. acc. know thou here teach-pas. sg. 3 Albanian writing
e pyeti mësuesi.
him ask-aor. sg. 3 teacher

(中略)

"Unë e di që një herë mblidheni te shtëpia e xha Naços,
I sg. 3. acc. know-sg. 1 one time gather-med. pl. 2 at house uncle N.-gen.
një herë te Rexhepi, një herë këtu
one time at one time here
... Unë e di që përgjojnë spiunët..."

I sg. 3. acc. know-sg. 1 loiter-pl. 3 spy-pl.
「僕もアルバニア語を習えたら嬉しいな」と少年は言った。
「ここでアルバニア語を教えていることをどこから知ったんだ？」先生が訊いた。

(中略)

「みんながナチョおじさんの家やレチエビのところやここに集まることは知ってます
... スパイが嗅ぎ回っていることは知ってます」

3) "Çfarë forme ka toka, Arben?"

"Të rrumbullakët."

"Nga e di ti se ajo është e rrumbullakët?"
from where sg. 3. acc. know-sg. 2 thou she be-sg. 3 round
「アルベン、地球の形は？」
「丸いです」
「地球が丸いってどこから知ったんだ？」

ちなみに1)では噂話の内容の繰り返し、2)では「アルバニア語教室」「スパイ」の存在など聞き手の「先生」にとり周知の事実の再話題化、3)では質問に対する返答の繰り返しが行われていると言える。

③定形でないが、先行文脈で特定化された (spezifiziertな) 直接目的語；

4) Më ke bërë vetëm një kërkesë: të të dërgoja një fotografi...
sg. 2. dat. send-impf. subj. 1 one photograph
Vetëm sot mora vendim dhe po ta dërgoj një fotografi.
just today decide-aor. sg. 1 and now sg. 3. acc. send-subj. 1

「君は僕に一つだけ頼んだね、君に写真を一枚送る様にと…今日、僕はやっとその一枚の
写真を送ることにした」

④既に言及されたものとして導入された定形直接目的語（句）；本文参照

重叙しない場合

⑤直接目的語がレーマである、新情報を含むか、または未知の文内容（特に補文）として記述される場合。

⑥定形でない直接目的語（句）。疑問代名詞や否定代名詞を含む場合；

5) Asnjë poçe s' kishin lënë pa thyer.

no bottle not stay-plupf. pl. 3 without broken

「どの水差しも割れずに残っているものはなかった」

⑦事前に言及されていないが、指示代名詞や指示形容詞によって限定される場合。

⑧関係代名詞（常に後方照応）によって表される直接目的語は重叙を必要とする。

i cili (重叙は義務的) që (非限定用法において重叙、限定用法では重叙せず)

が, ç, cili, kush など疑問代名詞に由来するこれら不定代名詞は重叙しない。これらは不特定な目的語として用いられており、重叙する場合と意味的には反対の条件にあると言える (Haspelmath 1997: 37ff.)。

6) Ç' të mbjellësh, do të korrësh.

what plant-subj. sg. 2 sow-fut. sg. 2

「撒いた種は刈らねばならぬ」

*Ç' të mbjellësh, do ta korrësh.

7) Ndihmoji cilit të duash.

help-imp. sg. 2+sg. 3. dat. whom want-subj. sg. 2

「君が[その人を助け]たい者を助けよ」

*Ndihmoji cilit t'i duash.

8) Jepia kujt të duash.

give-imp. sg. 2+sg. 3. dat. +sg. 3. acc. whom want-subj. sg. 2

「君が[その人に与え]たい者にそれを与えよ」

*Jepia kujt t'i duash.

(2) 2人称単数でも、Zotynë ty ruon「主は汝を見守っておられる」の様に強形tyのみが動詞に前置される例がある。

(3) アルバニア語の間接疑問文では、補文接続詞seと疑問詞が共起する例が珍しくない。

... e nukë dij se kaha vjen...

and not know-sg. 3 that from where come-sg. 3

"et non sciebat unde esset" (Jh 2:9)

「[葡萄酒が] どこから来たのか[召使い達は] 知らなかった」

(e nuk e dinte nga vinte)

(4)こうした現象はヘブライ語など他言語にもある (Givón 1990: 667f.)。

(5)代表的な人物には本文で言及した Pjetër Budi、同じくキリスト教要理 (1592年刊) を翻訳した Lekë Matrënga (1567-1619)、聖書物語集 (Cuneus Prophetarum 1685年刊) を編纂した Pjetër Bogdani (1630頃-1689) などが知られているが、その多くはアルバニア北部出身で、イタリアとも関係の深かったカトリックの聖職者である (Elsie 1997)。

引用文献

Bibla. Shkrimi Shenjt. Ferizaj(1994) [現代アルバニア語訳聖書]

Biblia sacra iuxta vulgatam versionem. Stuttgart(1994) [ウルガタ版聖書]

Çabej, Eqrem(1968). *Meshari i Gjon Buzukut (1555)*. Tiranë (reprint 1987)

Ressuli, Namik(1958). *Il Messale di Giovanni Buzuku*. Città del Vaticano

参考文献

Buchholz, Oda&Fiedler, Wilfried (1987): *Albanische Grammatik*. Leipzig: Verlag Enzyklopädie

Camaj, Martin(1960). *Il Messale di Gjon Buzuku. Contributi linguistici allo studio della genesi*. Roma: Shëjzat

Cirrincione, Angela(1968). *Sintassi albanese degli antichi scrittori*. Roma

Demiraj, Shaban(1985). *Gramatikë historike e gjuhës shqipe*. Tiranë: 8 Nëntori

Demiraj, Shaban(1993). *Historische Grammatik der albanischen Sprache*. Wien

Demiraj, Shaban(1994). *Gjuhësi ballkanike*. Shkup: Logos-A

Domi, Mahir(1995, 1997). *Gramatika e gjuhës shqipe I+II*. Tiranë

Elsie, Robert(1997). *Histori e letërsisë shqiptare*. Pejë: Dukagjini

Givón, Talmy(1984). *Syntax 1*. Amsterdam: J.Benjamins

Givón, Talmy(1990). *Syntax 2*. Amsterdam: J.Benjamins

Hamiti, Sabri(1996). *Letërsia shqiptare e vjetër*. Tiranë

Haspelmath, Martin(1997). *Indefinite pronouns*. Oxford: Clarendon Press

Hayashi, Hiroshi(1990). "Clitic doubling in Romanian from the viewpoint of discourse analysis" in 『アジアの諸言語と一般言語学』東京 (三省堂) 882-897

Matsumura, K. & Hayashi, T. (1997). *Dative and related phenomena*. 東京 (ひつじ書房)